群馬詩人クラブ
会報
No.293

編集／群馬詩人クラブ幹事会
代表／平野秀哉
発行／群馬詩人クラブ事務局
〒370-3102
高崎市箕郷町生原1730
龍昌寺
印刷　三協印刷
振替番号　00140-8-728969　狩野務

主な記事

●第23回現代詩作品展＆朗読会 …… 2～3
●詩集評 …… 4
堤　美代一行詩集「ゆるがるれ」
大橋政人
●新入会員紹介／受贈詩誌御礼 … 4
●詩の広場 …… 5～6
天笠次雄／松本茂晴
宇佐美俊子／大館光子
●次期幹事改選結果 …… 7
●群馬詩人クラブ会則 …… 7
●平成27年度総会・秋の詩祭案内 … 8
●編集後記 …… 8

浅原才市という詩人

大橋政人

信仰というものを大概の人は誤解しているようだ。何か、例えば神、さもなければ死後の世界などを無条件に信ずることだと考えている。しかし、信仰とはただ、別々になっているものが、本当は別々ではなかったということに気づくこと、それだけのことなのである。しかし、そのことを身にしみて体得することは実に難しい。浅原才市という詩人は最も純粋な形で信仰に目覚めた数少ない覚者の一人である。

浅原才市は石見の国（島根県）湯泉津に嘉永三年（一八五〇）に生まれて昭和七年（一九三二）に八十三歳で亡くなった、いわゆる妙好人（浄土系宗教の篤信家）の一人である。下駄職人を続けながら、鉋屑に詩を書きつけ、六十代からの二十年間に約八千篇の信仰詩を残した。例えば自分の〈生〉と〈死〉について、才市は次のような詩を書いている。

わたしゃ　臨終すんで　葬式すんで
みやこ（浄土）に心住ませて貰うて
なむあみだぶつと浮世にをるよ

＊

才市が臨終
死ぬる心が死なぬ心にしてもらう
なむあみだぶつにしてもらう

＊

これが世界のなむあみだぶつ
これが虚空のなむあみだぶつ
わしの世界も虚空もひとつ
をやの心のかたまりでできた

唯物論的図式で、〈私〉とはこの肉体のことであると解釈している人たちには全くのナンセンスにしか見えない世界である。才市を初めて世間に紹介した鈴木大拙という禅者は「彼は普通にいう妙好人だけでなくて、実に詩人であり、文人であり、実質的大哲学者でもある」と絶賛しているが、別々だと思っていた〈生〉と〈死〉が、別々でなかったことに気づいた人の世界は途方もなく、まばゆいものになっているのがわかる。

三番目に引用した「これが世界の…」の詩を読むと、才市の中では自分と虚空（宇宙）が溶け合っていることがわかる。一般には別々だと思われている〈時間〉と〈空間〉も才市の中では溶け合っている。〈生〉と〈死〉の溶け合った世界の光景をそのまま書けば、「臨終すんで　葬式すんで」というほかない。これは、もしかして人類が希求し続けてきた、あの〈永遠〉のことではないだろうか。

釈迦は「あれあれば、これあり」と縁起の法を説いた。本来一つであったものを二つに分けるのは〈言葉〉の作用である。才市は、〈言葉〉の在り様をとことん突き止め、世界まで突き抜けた天才であると言うほかない。

第23回 群馬詩人クラブ現代詩作品展を終えて

テーマ「つながる」

会場：前橋文学館（共催）
会期：6月7日（日）～21日（日）

出品者	作品名
新井　啓子	つきよのつばくろ
磯貝　優子	つながる日々
井上　英明	異国にて
内田　範子	分っ去れの碑　別れの道
金井裕美子	白いこども
狩野　務	つながる　Little foot
柄澤　絢子	寅次郎
川島　完	郭公（かっこう）　彼岸花をなくした茎のように
	無題
佐伯　圭	隊道倶楽部とその関連団体
三枝　治	朝虹
提箸　宏	そこに道がとおるということ
佐鳥　吉美	鎮魂歌
志村喜代子	ツナガリマセン　ツナガリマショウ
須田　芳枝	橋　桜・さくら　アカハラ
	人から人へ
関口　将夫	人という時間あるいはゆがんだ月
	聲（こえ）
関根由美子	誰か　ざぜん草
高田　芙美	楽園の入口
堤　美代	井戸　殯りの宮
富沢　智	愛して下さい
中澤　睦士	帰水の橋
平野　秀哉	子守りうた
福田　誠	得々クーポン　群馬テスト
松本　茂晴	惜岳の譜

（アイウエオ順）

去年に引き続き現代詩作品展が、前橋文学館と共催で、三階のオープンギャラリーで開催されました。作品は、詩とのコラボでそれぞれ風景をナイスショットで写したもの、物語性のある写真等。木の枝や葉っぱ、鳥の巣など自然をそのまま借りたり、手作りのかざり。家族のエピソードを絵にしたもの、身近にあるものを使って構成した大作。絵手紙、かつて登った山を模したようなオブジェと登山用具。旅の思い出の品を用いたメッセージ性のある作品。来場者に向けてのクイズなど多様でした。

イメージするだけなら限りなく発想して、色々つくれそうだが、時間とテクニックと、とうてい私にはできそうもない。毎回出品し

て下さる方の努力とその思いに感謝したいと思います。

今回のテーマ「つながる」は狩野務さんが考えてくださり、又、ポスターも狩野さんにお願いし明るい色調が好評でした。

今年も受付で行くことができたのは一日だけでしたが、来場者の為にも、もう少しいた方が親切でしょうか。

作品の飾り付けを昨年も今年も、中澤睦士さんが手伝って下さいました、ありがとうございました。

来場者の方のアンケートより

- 好きな詩をみつけられて良かった
- 今を生きて詩を書き続けている方々の作品が読めてありがたいなと思いました。
- 楽しいふんい気が伝わってきた
- 空間に満ち満ちた力を感じた、元気をもらった
- 企画は面白いが、展示物の文字が小さいものがあり、老人には読みづらい

オープンギャラリーで作品を介して、人と人とがつながれただろうか。

作品展の準備をオープンギャラリーでしていたら、ホールから軽やかなチェロを練習する音が聞こえて、心地良かった。

朗読会

6月13日(土)
14時～17時
前橋文学館ホール

参加者（朗読した方）

泉麻里　磯貝優子　井上敬二　内田範子
狩野務　柄澤絢子　佐伯圭　三枝治
提箸宏　佐鳥吉美　志村喜代子　神保武子
須田和子　須田芳枝　関根由美子
曽根ヨシ　高田芙美　田口三舩　中澤睦士
福田誠　松本茂晴

詩の朗読だけでなく、普段聞けないお話しも聞くことができました。井上敬二さんのギターでの弾き語り、志村さん、神保さんお二人の息の合った朗読もありました。ステージに上がって朗読して頂くので朗読する方のお顔も来場者からよく見えますし、マイクを使用するので声もはっきり聞こえます。朗読で、連詩や、テーマを決めてリレー詩、即興詩などもあれば、なお良かったかと思います。

文学館にお願いして、ステージに狩野さんの描かれたポスターの絵をイーゼルにたてかけて飾って頂きました。ありがとうございました。

作品展も朗読会も幹事としていたらないところがありましたので、おわびいたします。

（高田記）

詩集評

堤　美代一行詩集『ゆるがるれ』
死と生への凝視の力

大橋政人

『あの子じゃわからん』『野の銃口』に続く三冊目の一行詩集である。一行詩について堤さんは『あの子じゃわからん』の「あとがき」で「身の内からあふれる言葉に急がされるようにして詩句を書き止めた」と書いている。行分け詩がまどろっこしいほどの切迫感の中、自分の存在を足元から揺さぶられるような激しい自己凝視の中から堤さんの一行詩は始まってきているようだ。

人間は年をとり、死が近づくにつれ、なぜか生と死に鈍感になるものである。それは、死を克服した結果ではなく、ただ精神が磨耗しただけという場合が多い。今回の一行詩集の「あとがき」で「詩を書くとは、己の魂の在り処を探し続けることに他ならない」と書いているが、このような一種の求道心が核にあるからこそ、そこから「叫び」のような鮮烈な詩句が放射されてくるのだと思われる。

わが肉を荼毘に付す朝半夏生
死者数多胸に堰く朝桔梗咲く
庭に黄泉ひらかれておりトラノオ踏む
辛夷散るひとひらは骨片ひとひらは花
湯灌してこの世の庭は牡丹雪
雨あがり冥界を嗅ぐ銀木犀

半夏生にも桔梗にも辛夷にも死がへばりついている。激烈な生と死の対比である。少し重厚感過多の感もあるが、堤さんはあくまで「死」に拘る。「死」と釣り合ったときだけ、「生」は驚くべき美しさを露現させることを知っているからである。ただ、見方によってはその表現に大仰さが否めないのは、堤さんの中で生と死が別在していて（二元論が構築されていて）、その二つがせめぎあっているからである。生と死、肉体と精神、自己と他者、二元論は様々な場面に潜んでいるが、それはいつでも重々しく、そして重苦しい。

啓示とは桔梗という名の真紫
「もう、これっきりです」と立葵紅
通り雨桔梗ふふっと笑まひけり
験される嘘あり噴水横殴り

こんな詩篇もあった。同じ「桔梗」でも前出のものと違って、花の「真紫」そのものが言葉のない「啓示」になっていたり、「立葵」があからさまに全身を見せていたり、予想もしていなかった「噴水」の「横殴り」に自身、一瞬、言葉を失ったりしている。その瞬間、生と死という二元論がどこかへ吹っ飛んでいったのか。この軽みと爽やかさは、生と死の和解のせいか。一瞬、そんなことまで思わせるように詩がすっくと立ち上がっている。

新入会員紹介

■水野有人
住所…〒三七七－〇五四一
中之条町上沢渡三六四一－七五
電話…〇二七九（六六）二七一四

受贈詩誌御礼

＊御恵贈感謝いたします。

福島県現代詩人会会報 110
福島県現代詩集 2015
ふふ　詩人集団静岡「ふふ」編集委員会
福井県詩人懇話会会報 89
岐阜県詩人会会報 5
福岡県詩人会会報 162
岡山県詩人協会だより 15
栃木県現代詩年鑑 2015
兵庫県現代詩協会会報 37
関西詩人協会会報 78
静岡県詩人 124・125
宮城県詩人会会報 21
山形県詩人会会報 28
とっとり詩人（鳥取県現代詩人協会会報）32
いちご通信（大分県詩人連盟会報）12
中日詩人会会報 183
三重県詩人集 23
裸心版　こまつかん
詩人の輪通信 43

（八月二十日現在　敬称略）

詩の広場

桃

天笠次雄

隣組からの餞別や
衣類と米を背負って
阿左美駅から歩き
たしか戦時特別訓練隊に参加したのだった
七月中旬からの約一ヶ月
笠懸村国民学校の教室かに合宿し
おもな日課が
風草　桑原のあいだを
愛国飛行場とよばれた場所に通った
滑空機の操縦訓練であった
きわめて簡易な構造の初級のグライダーで
　あった
それでも練習の結果
高度ほぼ十メートル距離百メートルを飛んだ

記憶に　細部は失われている
いっそ　早くそうなればいい
宿舎に帰ると　学習のあと
桃が一個ずつ配られた
飛行場の近辺は　まだ桃の産地でもあった
草の匂いが濃く　桃
あとは風位や　八月の空のいろ
鷲の形したアルミの記章をもらって　終了した
十三か十四才の夏であった
風草の花は色だって匂いだって
風のままだ
その秋　いくつかの少年兵志願の受験があり
冬に入る頃から
飛行機製作工場へ動員され
学校には朝夕に寄るだけであった

二〇一五夏

松本茂晴

空虚で不毛な議論?が連日続いている
質問者は極力的を外して問いかけ
回答者はさらにはぐらかしに終始し
こんなことを繰り返し
時間の累積だけで事足りたとし
いつの間にか決められた方向に流れていく
何年も何十年も繰り返されてきた
この国のありよう

結論ありきの討論議論
同じ穴の・・・が見せかけだけの
時間稼ぎだけの議論を繰り広げているが
しかし・・・まてよ・・・
あの人たちを選んだのは
自分達であるのは事実であり
どのような結果が出ようと
自らに降りかかる

人間はどんな過酷な体験を経ても
時の移ろいに濾過され
聖水になったような錯覚で飲み干す
苦難や悲劇は忘却の彼方へ
ことの真意はおくとして
一時は戦犯と指名された人の末裔が
いつの間にか再びこの国や人々を
あの時代へ戻そうとしている

今の時代に起きている数多の問題を乗せた
一千兆円借金の泥船は
沈みゆく未来に向かって大海を彷徨
生命や財産を守るため必要と熱く語り
そう語りながら
生命や財産や未来を危うくしている

この沈みかけた泥船から
一番に逃げ出すのは誰か
いずれあなた方は
行く当てのない多くの人を置き去りにし
真っ先に逃げ出すのでしょう

明治維新と言われた時代の転換点から
ずーと百五十年も続くこの国の形
変えることのできない仕組み
苦しくても何があっても
言われるままに我慢して生きていくことが

幸せであると思い込み
破滅に向かう泥船に乗り合わせた不幸を嘆き
刹那的な快楽に身を置き
猛暑の夏を寒々と過ごす

だいたい十センチ

宇佐美俊子

玄関だけは閉まっているが
家では
もうずいぶん前から
寝室から居間
居間から台所
台所から風呂場
もどって居間から縁側へと
なぜか襖やドアが
だいたい十センチ開いている

これはひょっとして
死んでしまった猫たちの
この世にいたという証(あかし)
猫たちのために
いつも閉め切らずにいたら
いなくなった今でも
そうしてしまう
意識してやっていたことが
いつしかあたりまえの動きになり
癖になってしまった

もう猫はいないのに
今でもときどき
縁側でひなたぼっこをしたり
柱で爪研ぎをしているような
気もする

玄関だけは
ちゃんと閉めてあるから
猫たちはいつまでたっても
出ていく気配がない

有明

大館光子

――見ている
空を仰ぐ　が　その軌道に月はない
頭を軽くふる
白い月が揺らぐ
月は脳裏に懸っている

天童温泉　紅葉館
池の面にも月はある
築山も土塀も　それを越えて街並も
しらじらと有明月の下に浮く
四階のベランダに立っている
空と水　二つの月の間(あわい)

あの月が呆れる程の年を経て懸るとは
いや今迄も時にちらちら掠めていたような

「重いものはおろせたか」　と
私の中にしかと根付き
今は私を乗っ取るばかりのそれを
知っての上の問いである

東尋坊の岩壁　猪苗代湖の渚　有明海の干潟
落暉の中の　日御崎……
重いものを捨てるべく彷徨する場は
何時も水のほとりだった

月は　見ていたのだ

いや　月も軌道を外れたかった
だがそれは　人間の彷徨と同じく
ただ空しさを追うに過ぎなかったとしたら

月の問いは　自らへの問い
月の白さの
いたわしく

私は目を閉じる
揃えて伸べる両掌に　月を受けて
空へ還そう

ふと思う　肩の軽さ
明日の有明月に問おう
あの　重かったものの
行方を

次期幹事改選の投票結果

次期幹事の選定について、無記名・五名連記・七月二十日締め切りで投票をお願いいたしました。集計結果をご報告いたします。

○投票者数四十人（投票率三十六％）

得票数（高得票数順・同数の場合五十音順・敬称略）

十四票　金井裕美子
十三票　佐伯圭
九票　伊藤信一
八票　中澤睦士
七票　井上敬二
六票　新井啓子　小野啓子
五票　斉藤守弘　原田鰐　福田誠
四票　愛敬浩一　新井隆人　磯貝優子　内田範子　木村和夫　神保武子　関口将夫　関根由美子　富沢智　房内はるみ　向田きょーじ
三票　大塚史朗　武井幸子　時澤博　樋口武二　堀江泰壽　松本茂晴
二票　井上英明　大橋政人　金井治子　上林忠夫　小鮒美江　清水由美　城田博己　須田和子　曽根ヨシ　堤美代　鶴田初江　野口直紀　柳沢幸雄　山田弘子
一票　飯田光子　宇佐美俊子　江尻潔　片山壺晴　川島完　鈴木惠子　関谷隆　田口三舩　塚越祐佳　長岡荘三　萩原正夫　福田尚美　三方克　宮崎潤一　森ノ坂一詠

以前からの申し合わせにより、現幹事十名全員が退任し、これらの方の中から新たな十名の幹事をお願いすることになります。

それぞれ、ご事情やご都合もあろうかとお察ししますが、当該の方々のご協力を切にお願いいたしますとともに、投票に参加いただいた会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

群馬詩人クラブ会則（平成二十年改正）

一、群馬県内在住または出身の詩人及び詩の読者の共通の場として、詩の創造についての相互の研究を深め詩の社会的な機能を発展させ県内の詩活動に寄与することを目的とする。

一、組織
この会は代表幹事・幹事・会員によって構成される。幹事は、会員中より互選によって若干名を決定し、任期は二年とする。幹事会は会の事務及び運営についての一切の業務を執行する。会員は各詩誌に所属する者及び詩に関心を持つ者で会の目的を認めて加入した者とする。

一、運営
幹事会は合議制として年に数回会合し会報の編集、行事の企画実施等一切の運営にあたる。事務局は代表幹事宅に置く。総会は年一回行う。

一、事業
会報の発行、講演会の開催、詩画展、朗読会の開催、年刊詩集の発行など。

一、会費
会費を年会費三千円とし前納する。未納期間が五年を超えたものは会員に通知し、督促しても入金のない場合は退会とみなす。会計は幹事会に於いて処理し、総会で会計報告をする。尚、この会は、適宜寄付を仰ぐことができる。

一、その他
会報は年数回、幹事会によって編集し、県内詩誌の動勢・消息・出版物・行事の紹介をする。また、幹事活動補助費として幹事一人あたり年間三千円を支給する。

平成二十七年度 総会及び秋の詩祭のお知らせ

平成二十七年度総会及び秋の詩祭を左記のとおり開催いたします。

会員の皆様方、万障お繰り合わせのうえご参加くださいますようご案内いたします。

期　日　平成二十七年十一月二十三日（勤労感謝の日）

場　所　前橋テルサ4階　第3研修室

受付開始　午後1時30分～

総　会　午後2時～2時30分

秋の詩祭　午後2時40分～

講師　北畑光男氏

演題「朔太郎から村上昭夫まで」

懇親会　午後4時～

会場　前橋テルサ1階　オルビエターナ

会費　四〇〇〇円

〈秋の詩祭・講師紹介〉

北畑光男 氏

略歴

一九四六年岩手県生まれ。

酪農学園大学卒。

「歴程」「撃竹」同人。

村上昭夫研究「雁の声」主宰。

日本現代詩人会理事長、日本現代詩歌文学館理事・評議員、埼玉県立さいたま文学館運営協議会委員、日本文芸家協会会員、埼玉詩人会会員他。

一九九二年 詩集『救沢まで』
　第3回富田砕花賞

二〇〇四年 詩集『文明ののど』
　第35回埼玉文芸賞

二〇〇七年 詩集『死はふりつもるか』
　第13回埼玉詩人賞

二〇一一年 詩集『北の蜻蛉』
　第19回丸山薫賞

詩集八冊。

共著に『「日本の詩」100年』、『荒川流域の文学』『埼玉文芸風土記』、『（現代詩）の50年』他

編集後記

会報担当も今号を含め残り二号となりました。今号が二九三号です。毎回、受贈詩誌の入力をする中で、全国各県単位の詩の団体の会報で、これだけの号数を重ねているものを見ることはほとんどありません。「六十年」「三〇〇号」という区切りが目の前に迫っています。

私事ですが、私の生まれは一九五六年一二月。本会は翌年五月に結成されています。自らの定年と、本会の六十年が、半年の期間を置いてやってきます。

六十年ということの重みを感じながらも、本会が、現在、同人誌ではなく、県の詩人の組織として、どのような役割を担うことができるか、考える必要はあると思います。

ホームページが一つのとっかかりとなるのではないかと考え、会報編集と併せて担当してまいりました。中途半端ではありますが、基盤は出来たと考えています。今後、ホームページを新たな発表の場に利用する等、新たな試みが行える場として利用できる環境は整ってきているかと思います。

「書く」という孤独な作業は変わりませんが、本会がどんな役目を担っていくのか、これを機会に考えて行こうではありませんか。

（提箸　宏）